



令和6年
7月20日発行
第60号
真宗興正派
北吼山 屈足寺
0156-65-2167

納骨堂勤行・焼香



申しあげます。

目をとじれば
何かが見えてくる
生きているのではない
生かされているのだ

お盆法要

八月十六日(金)

午後一時より

初盆追悼法要・戦没者追悼法要
併修

読経 焼香
法話 住職

※納骨堂参拝は八月十二日から十六日午前中とします。この期間以外に納骨堂参拝を希望される方は事前にお寺までご連絡ください。

なお、できる限り法要にお参りし、法要終了後はお骨堂のお供物をおさげしましょう。

今年も猛暑の季節がやってきました。早くも全国各地から悲鳴の声があがっています。"危険な暑さ"との警告もあります。特にひとり暮らしの高齢者は熱中症に要注意です。

はやお盆が近づいてまいりました。先立ちし人を心から偲び、報恩感謝の誠を捧げる年に一度の行事です。ご家族とともに繰り合わせの上、お参りされますようご案内

第二十回 仏教公開講座 「聞法の集い」を終えて

春のさわやかな風そよぐ五月十六日、遠く香川県坂出市より西園寺住職田中光海師をお招きして開催されました。

今誰もが関心をもつ『終活』をテーマに、管内外から集った約五十名が熱心に聴聞、予定の時間はまたたく間に過ぎていきました。

高齢化社会を寂しい思いで生きる人が多い中、仏教に心よりどころを求めていく生き方を事例をあげながら丁寧に説かれました。

最後に、「年を取るの寂しいです。でも楽しいのです。」と語

った九十代のある女性の一言が深く印象に残りました。



田中光海先生

当寺開基百年を記念して始められた「聞法の集い」も、毎回楽しみにされる方が増える中、二十回の節目を終了しました。この間ご講師の諸先生はもとより、当寺役員、婦人会有志のご協力に改めて感謝申し上げます。
ひき続き衆望に応えて継続していく所存です。

聰水閑話三六

枯淡

水が好きだ。溪流の不断にながれる音。庭の木々にしんしんと降りかかる雨の音。伏流水の湧き水を、全身全霊をもって味わうこと。からだの芯から温めてくれるモール温泉に浸かること。水が好き、という感情は夏が近づくたびにやってくる。

人間の煩惱はさまざまな表現があるが、渴愛（かつあい）という言葉いかたがあるように「渴（かわ）き」として表現される。ブツダや親鸞が極めたように、人間の奥深くに根本的な煩惱があるとすると、人間は常に渴いている生き物であるといえる。だからこそ水は自然から与えられる恵みとして、人間の渴きを潤し生長させるものとして重要な意味が与え

られてきた。

一方で地震によって生まれる巨大な津波と台風による川の氾濫や土砂崩れなど、水の力によってもたらされる想像をはるかに超える現象にであうと、人間の非力と小ささをいやというくらい叩きこまれる。水は決して優しくはない。時に鬼になつて人間を一喝するような厳しさを持っている。畏敬とは、おそれうやまうこと。生き物であるかぎり水に対して畏敬の念をもつことはもはや当然のことのようにおもえる。

屈足寺の報恩講（ほうおんこう）を無事終えた翌日、香川県から来られた住職がかねてから強く希望していた屈足湖の水上散策にでかけた。天気は強い雨。一昨年来てくれたときに同様に強い雨で中止になったが、今回は風がないのでできるというので、ぼくと香川県の住職、そしてガイドさんの三人で決行となった。屈足湖には昔からガンケと呼ばれる露頭の絶壁がある。ガンケはアイ

又語で、別にカムイロキとも呼ばれていたという。カムイロキとは「神々が鎮座するところ」という意味で、年に一度神々が集まって情報交換する場所であるということ、大切な信仰の場だったことはいまでもない。ガンケの高さは100メートルはあるという。アイヌの神々はけっして超人的な存在ではなく、ヒグマやフクロウなど、北海道にいる動物たちがそのまま神様なのだ。そういった動物たちがガンケのうえでときに厳しい面持ちで、ときに団欒しながら会合している様子を想うとつい微笑ましくなる。

いつもこの湖にくるときは晴れている日がほとんどだが、今日にかぎっては空中に無数の縦線を描くような鋭い雨が降っている。それでも寒くもなく暑くもなくほどよい気温だった。ゆったりと漕ぎながらガンケに向かっていく。地質の専門家ではないので偉そうにはいえませんが、調査によるとガンケは十勝平野がまだ海だった時代から、四回ほどの噴火によって火砕流が堆積してできたも

のであるらしい。



(屈足湖を SUP で散策。右奥にガンケがみえる。)

湖上散策の醍醐味は、このガンケから数メートルのところまで近づいて観察できるところである。徐々にちかづいていくとガンケの表層がいつもとは違った表情をしている。雨と水蒸気によって岩肌が洗われ、濃淡

が一段と明確になっている。火砕流の流れが形づくった線上の凹凸には、褐色・黒・白と大きく三種に色が分かれている。そしてガンケをやさしく包み込むように生息している植物たちの緑が一層深くなってみえるのだ。

息を飲むような神々しさに住職さんも見いつたらしく、感嘆の音が湖面を渡った。そして一本のパドルを脇にはさんで合掌礼拝し、アイヌの神々に挨拶をした。湖全体をみわたすと雨と蒸気が仲よく入り混じっていて全体を暈(ぼか)し、幻想的な雰囲気をかもしだしていた。

「これは水墨画ですね」とつい口からほとぼりした。すると住職もガイドさんにもこやかにうなずいてくれた。

白と黒というモノクロの世界をつくりあげる水墨画の世界には、「滲み」とか「暈し」の感覚がある。湿潤な気候が影響してきたからか日本ではとくにこの感覚が強い、と教えてくれたのは美術評論家の矢代幸雄

さんだった。

白と黒とが暈けたり滲んだりするとその境目がなくなる。死と生、美と醜、そのような対立した分別が溶けるようにして混沌の世界へととうつりかわる。渴いた人間がほんとうに近づきたいと求めているのはそういういた世界なのかもしれない。

秋の行事

秋の彼岸会

九月二十三日（月）

午後一時

法話 副住職

※今年はおうるう年の関係でお中日は二十二日ですが例年どおりの二

十三日法要を勤めます。

第十六回

秋の公開講座

十月十二日（土）

午後一時半

講師

『あっちゃんと語る被爆体験』

「核」も「戦争」もない未来を願って

講師

千葉県原爆被爆者友愛会理事

小谷 孝子 氏

現在85歳

一九三九年広島県呉市に生まれる。

東京都及び千葉県で幼稚園教諭35年勤務。腹話術習得。退職

後より被爆証言活動開始、国内はもとより世界各国をまわっている。

秋の永代経法要

十一月九日（土）

午前十時

法話 未定



屈足寺のアナベル

[Redacted]

